

# 医療タイムス

週刊医療界レポート

2018.1/1・8 新春号 No.2333

新春特集

## トッパが語る



謹賀新年



### 新春レポート

韓国発 未病セミナー  
国家プロジェクトとしての未病研究  
日本での未病システムを報告

### タイムスレポート

がん専門病院併設では世界初  
患者1人ひとりの病状やQOLを考慮  
重粒子線治療施設「i-Rock」

### Top News

診療報酬0.90%マイナス、介護・障害は増 18年度予算折衝  
男性寿命、滋賀が初トップ 15年厚労省調査

## 冬の時代の診療所経営

### 「痛い在宅医」と「男の孤独死」



医療法人社団裕和会理事長  
長尾クリニック(尼崎市)院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業、医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、東京医科大学客員教授、近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」「平穏死という親孝行」など。  
クリニックHP <http://www.nagaoclinic.or.jp>  
長尾和宏オフィシャルサイト <http://www.drnagao.com/index.html>

昨年11月に発売された週刊朝日ムック「さいごまで自宅で診てくれるいいお医者さん」(980円)の監修をさせていただいた。この本には在宅療養支援診療所の登録をしている開業医が、厚労省に届け出た患者数や看取り数、往診回数などがそのまま掲載されている。診療報酬改定に合わせて出版されるとのことだが、前回は約4000の診療所の、そして今回は約2000の診療所の生データが掲載されている。全国各地域のデータ以外に、在宅療養に必要な情報が分かりやすく、広く掲載されているので役に立つと思う。だから全ての患者さんに「是非、一家に1冊置いてね」と勧めている。

1年前の年末には拙書「痛くない死に方」と「薬のやめどき」という本が出たが多くのの人に読んでいただいた。しかし読者からいろいろな批判もいただいた。最もこたえたクレームは、「長尾本を読んで父親の在宅医療を頼んだがひどい目にあった。私が父を殺した。在宅医療なんてやるんじゃない」というクレームであった。その娘さんとお会いして直接話を伺うことになった。私にも責任の一端があると考えたからだ。考えてみれば、確かにこれまで「在宅医療」や「平穏死」の本で美談しか語ってこなかったことに気がついた。それは医者勝手な都合や評価であり、患者さんや家族の在宅医療の真の評価は違うものではないか、という気がしていた。

そこで昨年末には、その家族との実際の対話を収録したドキュメンタリー本が出た。「痛い在宅医」(ブックマン社)という本である。「痛くない」に呼応させてあえて「痛い」とした。本邦初の在宅医療に批判的な内容の本である。何が痛いのか、どう痛いのか書店で立ち読みして感想をお聞かせいただければ幸いである。

一方、昨年10月には「独居高齢者の在宅看取りはどこまで可能か」という全国シンポジウムが神戸で開催され、大会長を拝命した。チラシが刷り上がる前に満

席となり、関心の高さがうかがえた。全国各地で始まっている「独居高齢者の在宅看取り」への取り組みを知るいい機会となった。しかし都市部では在宅死の約半数は検視であるという。かかりつけ医や在宅医ではなく、警察が看取っている(死亡確認をしている)のが実態だ。遺体発見まで何日か経過していると世間から「孤独死」と呼ばれる。

そこでシンポジウムの特別講演に兵庫医科大学解剖医の西尾元先生をお招きした。西尾先生の著書「死体格差」は世間で大きな話題になっているが、講演内容は衝撃的であった。孤独死は全国各地で年々増えていて大半は60歳代の男性である。アルコール習慣と強い関連があるという。私のクリニックがある尼崎市からも多くの孤独死が出て西尾先生の解剖台の上に乗せられているという。西尾先生は初対面の私に向かって「あっ、長尾先生は私の解剖台に乗るような気がする」と呟かれた。なんと失礼なことをいう先生だろうと困惑したが、冷静になって考えるとそんな可能性が十分あるような気がしてきた。私は自分の体が献体で医学生に解剖されるのは何とも思わないが、そのとき以来「解剖台には乗りたくない」と思うようになった。理由は自分でもよく分からない。そして何とかして孤独死を避ける方法を考えてみた。というわけで昨年末には「男の孤独死」という本も同時発売になった。

正月早々、暗い話題で申し訳ない。今年もよろしくお祈りします。